

My Thesis (私の学位論文)

医歯薬学研究部 歯科保存学分野 中西 正

Nakanishi T, Matsuo T, Ebisu S.**Quantitative analysis of immunoglobulins and inflammatory factors in human pulpal blood from exposed pulps.**

(ヒト歯髄血における免疫グロブリンおよび炎症性因子の定量的解析)

Journal of Endodontics 21: 131-136, 1995 [本文へのリンク](#)

徳島大学歯学部を 1989 年に卒業後、歯科医師として研鑽を積むべく、歯科保存学第一講座に入局しました。当時の私の考えとしては、大学での業務は臨床技量を向上させることであって、研究に軸足をおきたいとは思っていませんでした。まずは人並みに歯科臨床ができるようになってから将来像を構築しようと、昨今の卒業生と比較すると非常に安易な考えをしていたといえます。翌年、主任教授として恵比須繁之先生（のち大阪大学歯学部教授、大阪大学理事）が赴任され、「臨床のスキルアップは大学でなくても可能であるが、研究はそうはいかない。研究できる今の環境を活かそう」と諭されたことで状況は一変しました。自分に与えられた研究テーマは「抜髄（歯の神経を取る治療）を行うか、それとも歯髄温存療法を行うかを客観的に診断する新しい基準を確立すること」という壮大なものでした。背景として、う蝕（むし歯）除去中に露髄した場合、歯髄温存療法は禁忌とされ抜髄が適応されること、一方で抜髄した歯は破折リスクが高いとされ将来的に抜歯が懸念されることから、たとえ露髄しても歯髄が温存できれば長期的な歯の保存につながるため、その研究テーマは臨床的に大変意義がありました。研究の第一歩として、まず露髄時の出血から試料を採取する方法を検討し、それから健常歯髄と炎症歯髄の試料における炎症関連因子の比較検討を行いました。実のところ、採取できる試料自体が微量であったため、当時の実験手法において解析可能な試料数を揃えるのに苦労しました。最終的に、炎症歯髄試料から免疫グロブリンやプロスタグランディン E₂ 等が有意に高濃度に検出された結果を論文にまとめることができ、これが私の学位論文となりました。歯科領域の小さな雑誌ですが、初めて書く英語論文に悪戦苦闘し、未熟ながらも掲載が決まったときは安堵したことを思い出します。また、学生が使用する欧米の歯科保存学関連の成書である「**Endodontics: Principles and Practice**」に、この論文が参考文献として引用されているのを偶然発見したとき、いくらかでも歯科保存学に貢献できたことを誇らしく思ったものです。その後、歯髄炎の病態形成における様々な因子の役割について研究を行ってきましたが、上記の壮大なテーマについては 20 年以上経過した今日でも残念ながら未だ道半ばの状況であり、まだまだやるべきことが沢山あると感じています。学位論文をこれからまとめる若き研究者の皆さん、探究心を忘れず目標に向かって自分の信念を貫いてください。